

**Translations with Commentary:
Three Poems from the latest collection by Kono Satoko,
*Everything happening on earth has been watched from here***

**Selected and Introduction by Rina Kikuchi¹
Translated by Rina Kikuchi and Shane Strange²**



3

* This working paper is a part of joint research KAKENHI (Grants-in-Aid for Scientific Research) 15KK0049.

¹ Faculty of Economics, Shiga University. http://researchers.shiga-u.ac.jp/html/100002503_en.html
Contact:kikuchi@biwako.shiga-u.ac.jp

² Creative Writing, Discipline of Creative and Cultural Practice, Faculty of Arts and Design, University of Canberra Contact: Shane.Strange@canberra.edu.au

³ The cover page of *Everything happening on earth has been watched from here* (*Chijō de okita dekitoto wa zenbu kokokara miteiru*, 2017).

CONTENTS

INTRODUCTION

河野聡子詩三篇を英訳するにあたって

POEMS

Head Ache

専用

Spin Cycle

エアロバイク洗濯マシーン

Shoe Power

靴

TRANSLATORS' NOTES

Introduction

This is one of the outcomes of my translation project with the poets based in Australia. This project is a co-translation book project, which involves seven Australia-based poets, translating contemporary women's poetry written in Japanese, for a bilingual anthology. The aim of this project has been to translate or transform poems originally written in Japanese into poems that live and breathe as poems in English. As the only native Japanese speaker on the translating side of this project, I tried to bridge poets who write in Japanese and poets who write in English, often becoming a messenger between the poets in order to transform the poem from Japanese to English.

Shane Strange is a poet, publisher and editor at Recent Work Press, a micro poetry press based in Canberra. Kono Satoko is a Fukuoka-born poet, based in Tokyo. I have chosen three poems from Kono's latest collection, *Chijō de okita dekgoto wa zenbu kokokara miteiru (Everything happening on earth has been watched from here, 2017)*, for Shane and myself to translate together.

Because the selection was made for the anthology, Kono's longer prose poems could not have been chosen unless presented as an excerpt, which I decided not to. I have chosen the satirical, black humored poems, which can represent one of the most important characteristics of Kono's poetry.

Kono's *Everything happening on earth has been watched from here* is her fifth poetry collection. It is visually innovative, and some poems are published on black paper with white letterings. She leads a group of young artists, TOLTA, which she describes as a 'verbal art unit', which challenges the boundaries of poetry through performance, installation and graphic text work. She edited the anthology *Centenary of Japanese Contemporary Poetry* (2015) and writes monthly book reviews for *Western Japan Newspaper*.

河野聡子詩三篇を英訳するにあたって

本翻訳は、近現代女性詩研究の一環として、2016年12月に在外研究先のオーストラリア・キャンベラにて立ち上げた「詩人による詩の翻訳プロジェクト」の一部である。本プロジェクトは、詩を他言語に＜詩として＞移行する方法を探求することを目的とし、キャンベラとその周辺に住む英語詩人らの協力を得て、日本語詩を英語詩として移行することを試みたものである。

河野聡子氏は、TOLTA というヴァーバル・アートユニットの代表者で、さまざまな言語的芸術作品に挑戦している詩人であり、アンソロジー『現代詩100周年』（2015年）の編者でもある。これらの三篇は、河野氏の第5詩集『地上で起きた出来事はぜんぶここからみている』（2017年）より、著者の許可のもと英訳し、転載したものである。河野氏には、出版前に詩集のゲラをお送りいただいたうえに、翻訳過程での各質問に答えていただくなど、多大なご協力をいただいたことをここに感謝したい。

本稿には反映されていないが、『地上で起きた出来事はぜんぶここからみている』は、正方形型の本に、横書き・縦書きが混在、ここに英訳した「エアロバイク洗濯マシーン」と「靴」が収録されているパフォーマンスポエトリー『代替エネルギー推進デモ』という作品にいたっては、黒い紙に白い文字で印刷されるというアバンギャルドでデザイン性を重視した詩集となっている。「代替エネルギー推進デモ」は、41の短詩からなる舞台作品であるが、河野氏はあえてこれらの詩篇を「詩」とよばず「パート」と名づけている。黒地におどる文字は小さくなったり大きくなったりすることで、舞台上の声の抑揚を反映しているかのようにもみえる。

社会批判的な視野と、社会風刺をブラックユーモアでからめた作風は、河野氏の持ち味であろう。英訳にあたっては、ブラックユーモアを好む詩人、シェーン・ストレンジ氏にご協力いただいた。

まったく日本語を解さないストレンジ氏との「共訳」を選んだのは、本翻訳プロジェクトの目的が、「完璧な英訳（というものが存在すると仮定して）をめざすこと」でも、「よい翻訳（というものが定義されていると仮定して）をめざすこと」でもなく、あくまで「英語詩として読み、楽しめる詩に、日本語詩を英語で組みかえること」であったからにはほかならない。このためには、英語で詩を書く人間の協力がなければならない。それ

は、日本語が母語であり、日本語がいかに堪能であろうとも、それは「日本語で詩が書ける」ということを意味しないのと同様で、私には、英語で詩を生み出す詩人が必要であったのである。

翻訳といえば、ひとつの言語からもうひとつのいわゆるターゲット・ランゲージ（この場合は英語）に置き換える作業をさすわけで、詩の翻訳も同様の作業だという印象があるかもしれない。しかし、詩の翻訳をすればするほど、私が訳しているのは実は言語ではない、と私は思うようになった。もちろん、翻訳には言語能力は必要である。英語がわからなければ、英語訳はできない。しかし、英語ができれば英語詩を味わえるのかといえば、それは、日本語が読めても日本語詩を楽しむ人が少ないのと同じく、そうとはいえない。さらに、日本語が母語であっても、日本語で詩を読み書きできる人が少ないのと同様に、英語が母語であるとか英語が「できる」ということは、必ずしも英語で詩を読み書きできることを意味しない。日本語詩を英語詩に翻訳するということは、英訳詩は「詩」になっていなければならない。英語で詩を書けなければ英語詩に訳することも困難である、ということがこれまでに私が学んだ詩の翻訳に関する厳しい現実だ。

詩人らとの共訳作業では、共訳者の詩人が日本語がわからないにもかかわらず、その詩の真髓をいともあっさり理解することに、幾度も驚かされた。日本語母語者で詩を読みなれない人に詩の解説をするよりも、日本語をまったく解しない英語詩人に日本語詩の解説を英語でするほうが、意外なほどに簡単だ。これは、聞き手が「詩」という言語表現に精通しているからだ、と私は考えている。

詩の翻訳には数々の困難がある。詩の翻訳で私が重視しているのは、「言語の移行」ではなく、リーダー・リスポンズあるいはリーダー・リセプション、つまり読者が詩を読んだときに見ること・聞くこと・感じることだ。日本語詩を読んだときに、詩をとおして読者が見たり・聞いたり・感じることを、それらを、英訳詩を読んだ読者が、同じように見たり・聞いたり・感じたりできるように英訳詩ができあがることを、もっとも重視した。たとえば「なんとなくもやっとするな」というような読後感。「笑えるんだけどなんだか悲しい気もする」というような読後感。日本語詩を読んだとき感じるなにかを、英語詩を読んだときにも感じられるように「詩を移行」することが大切だと思っている。

具体的に本稿の三篇について述べると、英訳詩は英語詩としていきたものにするため、各行は必ずしも対応していない。行を合わせたり、語順を日英で合わせたりすることよりも、英訳詩が、英語詩として鑑賞にたえうるものとなることに価値をおいたからである。

タイトルについては、河野氏の三篇のタイトルはどれもいわゆる「直訳」にはなっていない。理由は、直訳では英訳詩が英語詩になりえないと判断したからである。詩のタイトルは、日本語でも英語でも、詩の生命線だ。タイトルは、英訳詩ができあがってから、内容にふさわしく、日本語のタイトルの特徴をもいかしたものになるよう、工夫した。「専用」というタイトルは、詩中に各曜日「専用」の七つの頭が存在することからきた、内容にぴったりの簡潔なひとことだ。しかし、この簡潔なひとことをしめす簡潔な英単語ひとつは、残念ながら存在しない。詩の内容にあわせると「Especially made/used for OXOX」とか「Only for OXOX」というよう表現になるかと思われるが、このような説明を英訳詩のタイトルにすれば詩がぶち壊しである。可能性として「Especially for」のような形で余韻を残すタイトルもあったかもしれないが、「Especially for OXOX」の OXOX の部分がぼやけすぎてタイトルとしての効果は薄い。

この詩の英訳詩タイトル「Head Ache」は、共訳者のストレンジ氏がある日「この詩は頭たちの詩。頭たちが悩み苦しんでいる、頭の持ち主も悩み苦しんでいる、そして、訳者の僕の頭も翻訳に悩んで苦しんで、みんなが悩んで頭を抱えている詩」と言った瞬間、

「この詩のタイトルは Head Ache だ」と叫んだことで決まった。河野氏の原詩が持つ、シュールでかつユーモラス、大声で問題提起を叫ばずに S F チックな設定にくるんでいるけれど切実な社会問題提起をしている、そんな雰囲気がいきるタイトルに私は驚いた。これは、いわゆる<研究者>の頭では絶対に思いつかないタイトルだが、これほど内容にぴったりな、ブラックユーモアの効いた、そして原詩同様簡潔なタイトルはない、とも思う。

「Head Ache」とふたつの単語にわけていることも重要で、これは head（誰の頭かはわからないが「頭」なるもの）が、ache（苦しみ痛み）を訴えているのであって、単なる「headache（頭痛）」ではない。

同様に、「エアロバイク洗濯マシーン」という詩のタイトルは「Spin Cycle」へ、「靴」は「Shoe Power」へと変容した。この二篇は『代替エネルギー推進デモ』を成すふたつの詩（パート）だ。このシークエンスでは、ありとあらゆるものが「エネルギーを生む」ことにつながっている。エアロバイク洗濯マシーンは「エアロバイク」と「洗濯機」がひとつになった「マシーン」を想像できるタイトル。英語で、spin cycle は洗濯機がぐるぐる回る運動を意味し、同時に、ジムにあるエクササイズ用のエアロバイクを意味する。日本語読者が「<エアロバイク洗濯マシーン>って、エアロバイクと洗濯機が一緒になった機械のことかな」と思って詩を読み始めるように、英語読者は「<Spin Cycle>だから、ジムのエクササイズバイクか洗濯機のことかな」と思いながら詩を読み始めること

になる。「靴」は、単純に直訳し shoes とすることもできただろうが、この詩が「靴」についての詩であるというよりは、「靴が生み出すエネルギー」についての考察であることを強調して、そのシニカルな笑いを込めた「Shoe Power」とした。

のんびりとした大地で暮らすオーストラリア人に、「専用」にあらわれるようなぎすぎすとした会社社会は理解しにくいのではないかと思ったが、そんなこともないようであった。「靴」の宮沢賢治の引用部も、翻訳で新しい息吹を手にしたようにさえみえる。シュールな河野詩の世界を日英で楽しんでいただければ幸いである。

2017年11月 キャンベラにて

菊地利奈

専用

骨の枠で頭がしめつけられてつらい。

骨を切ってぼくをとりだしてほしい。

ある朝ぼくの首がそういったきり、キャビネットから出てこなくなった

月曜日専用の首である

ついにきたか

火曜、水曜、木曜、金曜の首はつぶやいたが、土曜と日曜の首は寝ていた

近年首のひきこもりは社会問題になっている

ぼくの首は7つしかない

たった7つの首で、月曜から日曜までの7日間を切り回している

ぼくらは生まれたときからキャビネットを持っている

標準仕様のキャビネットは扉が6つあり、それぞれちがう首が入っている

毎日ちがう首で学校へ来なさい。

適切な時と場合に適切な首を選びなさい、さもないと

このように毎日首のちがう教師はぼくらを脅したものだっただ。

器用な首は美術の日に、体育が得意な首はドッチボールの日に、計算が得意な首は算数の日に。

おしゃべりな首、根気のある首、喧嘩っ早い首、泣き虫の首、見栄っ張りの首

今日はどの首にしようか

これを曜日で決める同僚は気楽で、気分を変える上司は最悪である

とはいえぼくの上司もかつては気楽な上司だった、ところが

「人間としておもしろい」のは首を気分を変える者

なる調査結果が発表され、上司は首をランダムに変えるようになった

月曜の首は変化と予測不可能な現象が苦手だった

月曜の首はいちばん頭がよかった

月曜の首はさっさと絶望した

月曜の首がひきこもりになったのも無理はなかった

Head Ache

“My skull’s being squeezed,
cut the bone, take me out!”

This was Monday head.

“I knew this was coming,”

mumbled Tuesday, Wednesday, Thursday, and Friday heads.

Saturday and Sunday heads were asleep.

Managing heads is becoming a problem,

with only seven

to last the week.

They have lived in the closet since the day I was born.

A closet with six doors. Behind each door, a different head.

At school, teachers said:

“Come to school each day with a different head.”

“Choose the right head, or else...”

Creative head was for the day of art class;

Physical head for playing dodge ball;

Maths head excelled at calculation.

Chatty head, stubborn head, pushy head, sooky head, stuck-up head –

How can I get my heads together?

A care-free colleague said use the days of the week.

Bad bosses choose their heads by their mood.

My boss used to be care-free, until he read an article:

“Impressive People Choose Their Heads by Mood”.

He changed his head accordingly. It did no good.

Monday head – the cleverest head –

can no longer cope with the world as it is

and so has abandoned all hope.

I can understand this, I guess.

月曜ほど頭がよくない残りのぼくらは途方にくれ
いまキャビネット越しに口論しているところだ
月曜の首当番をジャンケンで決めろというのか
ジャンケン、
首には手も指もない
何度やっても土曜の首が後出しするため、ロジャンケン中止になった

むかしの人にとっては、顔の美醜が大きな問題だったそう
少なくともひとつは首についている顔ごときが、どうして問題だったのか
まるで夢物語のようだ
明日は月曜日で、首問題は未解決である
こうしてぼくも「人間としておもしろく」なっていくらしい

(『地上で起きた出来事はぜんぶここからみている』2017年、pp.20-21)

“We, the rest of the heads, who are not as clever as Monday head, are bewildered.”

They argue through the closet doors.

“Are we meant to decide who will take Monday’s place by playing ‘scissors, paper, rock’?”

Heads don’t have fingers or hands!”

They try a talking version:

“Sci-ssors, pa-per, rock!”

Saturday head cheats every time.

Tomorrow will be Monday, and the head problem remains unsolved.

Once upon a time, it was important to present a beautiful face to the world.

But now, with each head having one face,

it is more important to choose the right head.

I will just have to choose my head

like a boss.

(Poet to Poet: Contemporary Women Poets from Japan, 2017, pp.167, 169, 171)

エアロバイク洗濯マシーン

(「代替エネルギー推進デモ」より)

全世界の男女が美容とダイエットにかける情熱、深夜のテレビ番組でダンベルや得体のしれないプラスチック製の器械を買いこむ人々のことを考えてみてください。代替エネルギーとして求められるのは、この情熱をエネルギーへと変換し、ダイエットを完遂させ見栄をみだし運動不足も解決し将来の成人病に備えながら日々の生活に必要な家事さえ行うという一石五鳥ともいえる仕組みです。これを実現させるのがエアロバイク洗濯マシーンです。バイクをこぐこと、それはすなわち洗濯をすることであり、運動をすることであり、健康に配慮することです。スポーツジムにもエアロバイクがずらりとならび、人々は壁や窓にむかってひたすらこぎ続けると同時に、コインランドリーの使用权も手に入れます。

(『地上で起きた出来事はぜんぶここからみている』2017年、p.36)

**Proposals for new forms of alternative energy:
Spin Cycle**

Think about men and women the world over who are obsessed by beauty and diet—people who buy weights and useless plastic machines on TV shopping channels in the middle of the night. Have you ever wondered how we could harness this obsession? What if we could stop the useless diets, look good, get healthier and reduce the risk of preventable disease, all while doing the daily chores? Introducing ‘Spin Cycle’: a combination exercise bike and washing machine. Cycle through your washing while getting healthy and saving the planet. Have you seen the stationery cycles lined up in a row at the gym, with people pedalling forever staring at the wall or out the window? They’re getting nowhere! ‘Spin Cycle’—pedal your way to good health *and* do the laundry.

(Poet to Poet: Contemporary Women Poets from Japan, 2017, p.173)

靴

（「代替エネルギー推進デモ」より）

靴こそは、人間の力が無意識にふるわれている最たるものです。毎日の生活に欠かせず、歩くたびに何らかの力を受け、くたびれ、しいたげられているが、けっして文句をいわず、雨にも負けず、風にも負けず、雪にも、夏の歩道の暑さにも耐え、穴があいても踵が取れても、ぐちひとつ言わず外科手術に耐え、小石や泥の道でも従順に人間の足を守り従っているのです。その彼らが発電もできるとなったら！ 人間はついに靴に頭があがらなくなり、上ではなく下にあるものこそが偉大なものとなり、それでも靴はけっしておごりたかぶらず、そういうものに私はなりたい、などということもない。こんな謙虚な靴たちが、いまやぞくぞくと歩き出そうとしています。

（『地上で起きた出来事はぜんぶここからみている』2017年、p.59）

**Proposals for new forms of alternative energy:
Shoe Power**

Look at shoes. Why do we ignore them? What power we are wasting! Shoes are necessary in daily life. Every time we walk, they make power. Shoes get tired and they are humiliated. Despite this, they never complain. They stand strong in rain. They stand strong in wind. They stand strong in snow. They endure the heat of the pavement in summer. They don't even grumble when they are worn through, or when their heels come off and they have to have surgery. They protect the feet of human kind so obediently—even on the muddy path; even on the gravel road. What if this power could produce electricity? Finally we would bow down to them. Those who are at the bottom will rise. Shoes would not brag, but remain humble. They would never say 'I want to be *all that*.' Now these humble shoes arise, taking their first steps, marching towards us, marching in the same direction.

(Poet to Poet: Contemporary Women Poets from Japan, 2017, p.175)

Translators' Notes

'Spin Cycle' and 'Shoe Power'

Both of these poems are taken from a poetry sequence with 41 parts called 'Daitai enerugii suishin demo' ('A March for Alternative Energy'), written for theatrical performance.

'Shoe Power' contains references to the very famous poem 'Ame nimo makezu' ('Strong in the Rain') written by Miyazawa Kenji (1896-1933). The lines 'strong in the rain', 'strong in the wind' quote this poem, as does the phrase which we translate as 'I want to be *all that*'

